セッション事後報告書

**「アメリカ批判理論の挑戦――新自由主義と権威主義の批判」**

開催日時：10月31日（日）12：30〜14：30

開催場所：オンライン（Zoom）

参加人数：12名（登壇者除く）

世話人：日暮雅夫（立命館大学）

報告者：日暮雅夫（立命館大学）、青柳雅文（立命館大学）、市井吉興（立命館大学・非会員）

討論者：大村一真（同志社大学・院）

　本セッションは、今年3月に出版した『アメリカ批判理論――新自由主義への応答』（晃洋書房）を手がかりに、アメリカ批判理論の方向性を再考し、フランクフルト学派とフェミニズム、ポストモダン派等の交錯の可能性を探ろうとしたものである。

　批判理論の観点から社会思想を研究する日暮、アドルノを中心にフランクフルト学派を研究する青柳、批判理論・新自由主義・スポーツ社会学を研究する市井が、同書のそれぞれが担当した章を分析しながら論点を提示した。その後、討論者として、同じくハーバーマスを始めとする批判理論を研究する大村が問題提起を行い、各自の応答の後フロアを交え更なる討論を進めた。各報告のタイトルと要旨は、以下であった。

　日暮「新自由主義的における光――M.ジェイ、W.ブラウン、N.フレイザー」

日暮報告は、同書掲載のジェイ、ブラウン、フレイザーの各論文を検討するものだった。ジェイ論文は、新自由主義を新たな合理性の一種として捉え、それを目的合理性・機能主義的合理性・統治性的合理性の交錯と見る。そして、それらに、熟議・討議の中で論拠を挙げて合意を目指すコミュニケーション的合理性を対置することに光を見出そうとした。特にその中でも、機能主義との関連で「時間性」の問題を取り上げ、目指すべきコニュニケーションは、熟慮する、心のこもったものでなければならない、とした。しかし、新自由主義は、合理性の観点とともに嫉妬や羨望などの攻撃的感情の観点からも解明されるべきものであり、ブラウンがこの側面を特に取り上げていた。ブラウンは、新自由主義的主体の生成を、ハイエクの新自由主義、ニーチェのルサンチマンとニヒリズム、マルクーゼの抑圧的「脱昇華」が合成された「フランケンシュタイン」の誕生ととらえた。ブラウンの分析は鋭いが、抵抗の拠点を見出せない弱点があった。それに対して、フレイザーは、新自由主義的ポピュリズムに「進歩的ポピュリズム」を対置し、解放の光を見出そうとする。それは、アメリカの労働者階級と中流階級の主要なセクターを含む再分配の政治と、女性、移民、有色人種、セクシュアル・マイノリティの人々の利害を代表する包括的な承認の政治とを結合させようとするものであった。

青柳雅文「権威主義とトランプ主義　――トランプ以後のアドルノ読解」

ゴードンは、アドルノらの『権威主義的パーソナリティ』を手がかりとして、トランプ主義を権威主義から読み解いた。権威主義的パーソナリティは、心理学のたんなる類型を意味するだけでなく、現代社会の差し迫っていて全般的な特徴を意味する。そもそも類型論自体が社会の趨勢に条件づけられ、その制約の上で成り立っているのである。トランプ主義もまた、ドナルド・トランプ個人に帰するものではなく、また特異な事柄や例外的な事項でもなく、むしろそれが生み出される社会の趨勢を反映したものなのである。トランプ主義は、アドルノが論じた文化産業と同様に、規格化という事態を含んでいる。しかもそれは、トランプ主義を生み出した社会そのものを反映しているのである。トランプ主義は文化産業の別名として、文化全体の無思想性を表し、こうした文化のもとで人間の思考や経験もまた空虚な形式に陥る。トランプ主義においては、社会文化そのものが空洞化され、その中での言説も空虚になり、批判そのものが機能不全になる。それでもなお批判を続ける努力が必要であるのとともに、問題解決の可能性のひとつとして、文化・芸術の領域を経由した〈かたち〉の思想を提示した。

市井吉興「Uber Sportと権威主義：トランプ主義の台頭にスポーツは、どのように関わったのか」

市井の報告は、トランプ主義の台頭にスポーツがどのように関係したのかを読み解くことにある。また、その読解を含めた現代スポーツの批判的考察に、ペンスキーの「遅れてきた認識論(late epistemology)」が、どのような気づきをもたらすのか、検討を試みた。報告者は、トランプ元大統領の「スポーツへの介入（主にツイッターで発信されたＮＦＬやＮＢＬの特定の選手への不満や怒り）」が、アメリカ国民の「分断」を導いたことを指摘する。しかし、このような分断を生じさせた原因をトランプ個人の問題ではなく、「スポーツメリトクラシー＝実力/能力主義」を強化しているアメリカのスポーツシステム（Uber Sport）の問題、つまり、合理性や効率性を追求する「スポーツ」とそれが実践される「空間/場」の検討を提起した。そのような検討にあたり、「ある程度の懐疑主義と自己反省性の習慣を育てられるより多くの心理的、社会的な空間の構築」を提起する「遅れてきた認識論」が鍵になると、報告者は指摘した。

討論者の大村一真は以下のコメントを述べた。

1. 今回全ての報告の準拠点であるジェイ・日暮両名による編纂の論集『アメリカ批判理論』はフランクフルト学派の第一世代（アドルノ）から第二世代（ハーバーマス）にかけての批判理論が、アメリカでどのような発展を遂げている最中であるのかを示していると同時に、アメリカの批判理論がどのような傾向を持っているのかを示すことの手掛かりになる。新自由主義・権威主義・文化産業を連続的に捉えようとするこの論集の意図は、野心的であると同時に、その意図そのものを批判的に検証する必要性がある。

2. 日暮報告は、新自由主義に対しての抵抗の方法として、アメリカ批判理論の代表的な論客であるマーティン・ジェイとナンシー・フレイザーを取り上げている。一方で、ジェイはハーバーマスのコミュニケーション的合理性に注目し、新自由主義に対抗するため、そのような時代状況から距離を置きながら熟議し、考えるための時間が必要であることを論じている。これに対し、フレイザーは、むしろ直接的に新自由主義に対抗するための承認と再配分を結合する進歩的ポピュリズムを擁護している。このように同じアメリカ批判理論の中で異なる抵抗の方法が提案されていることは、アメリカ批判理論の「分断」とみるのか、それとも「共同戦線」とみるのか。

日暮の返答：ジェイとフレイザーの対抗策は、新自由主義と権威主義に対抗するという点では共通の立場に立っているが、それを異なるレベルで表現していると言えるだろう。ジェイは、コミュニケーション的合理性に立脚した、遅い熟考するコミュニケーションの必要性を訴えている。他方でフレイザーは、「進歩的ポピュリズム」を提唱し、労働者による再分配の政治と、マイノリティによる承認の政治の結合を呼び掛けている。ジェイは、討議する市民的公共圏を活性化することで問題を解決しようとする立場であり、フレイザーは必ずしも市民的公共圏での討議のみに絞らず多様に行動する立場であると思われる。この両者の立場は、相補的に捉えられるのではないか。

3. 青柳報告は、トランプの権威主義を文化産業との連続性から捉えようとするピーター・ゴードンの主張に関するものだった。トランプは、ある種の怒りの消費の娯楽を、支持者と反対者に与えており、その意味でアメリカ国民の怒りが新自由主義を変革する動向へと架橋されるのではなく、むしろ消費され続けていることをゴードンは野心的に指摘している。しかし、トランプと旧来のファシズムの相違を際立たせるゴードンの考証は、今後も批判的にその妥当性を検証する必要性がある。とりわけ、トランプには明確なイデオロギーがなく、そのイデオロギーの欠如という点からトランプの権威主義をファシズムとは異なるものであると即断することには慎重にならなければならないのではないだろうか。

青柳の返答：ヒトラーとトランプは歴史的・政治的背景が同じではないので、ゴードンの言

うように異なると主張することが妥当かどうかは、たしかに検討の余地はある。その一方で、

レイシズムについて、今日のレイシズムが本当にレイシズムなのか、レイシズムという装

い・パフォーマンスに過ぎないのではないか、という問いを投げかけうるのではないか。ト

ランプ主義におけるイデオロギーという場合、イデオロギーでもって何を意味するか、とい

うことから確認する必要がある。トランプ主義のひとつの特徴としては、前言撤回を繰り返

すような、首尾一貫性のなさにあるように思われる。

4. 市井報告は、新自由主義を初めとする現代の諸問題を批判的に論じるための「視点」と「立場」について考察するペンスキーの主張を整理するとともに、本論集の要である文化産業の問題を、スポーツという観点から深化させるものであった。では、現代の文化産業としてのスポーツを批判的に論じるための「視点」と「立場」はどのように獲得できるのであろうか。

市井の返答：討論者からの質問に対して、まず、報告者は現代スポーツ批判をペンスキーが整理したトクヴィルやアドルノの「遅れてきた認識論」をふまえて検討することは、困難な作業であると率直に述べた。ただ、「遅れてきた認識論」が提起する「ある程度の懐疑主義と自己反省性の習慣を育てられるより多くの心理的、社会的な空間の構築」という点をふまえるならば、現在のスポーツを支えるガバナンスや制度――なかでも、オリンピックやIOCの戦略――に対抗する新しいスポーツ（たとえば、スケートボード）の誕生と発展のプロセスから検討することができるだろうと回答した。

その後、参加者との質疑応答に移行した。質問者には、Zoomのチャット機能を用いて質問がある旨を伝え、カメラをオンにしてもらい発言してもらった。発表者の日暮に対して大きく三つの質問が出た。

質問1：ナンシー・フレイザーは「進歩的ポピュリズム」を擁護し、「進歩」という用語を好意的に用いている。しかし、フランクフルト学派の第一世代（アドルノ・ホルクハイマー）はこの「進歩」を徹底的に批判していた。ということは、現在のアメリカ批判理論は、この進歩という用語を好意的に解釈するきっかけは何だったのか。

日暮の返答：『啓蒙の弁証法』に見られるように、確かに、フランクフルト学派においては、「進歩史観」に対する批判が重要なモチーフとなっている。しかし、ハーバーマスやホネット以降に展開された議論を考えると、歴史における「進歩」を全否定すると、コンテキストにおける相対主義に至る危険が生じることになる。そこで、形式的なものであれ何らかの歴史における進歩を語らざるを得ないという認識が生じる。フレイザーの場合は、「再分配」と「承認」の前進、さらにはその両者を総合して反省する「代表」の前進、つまり政治的平等性の前進がその尺度ということになろう。

質問2：マーティン・ジェイは、ハーバーマスのコミュニケーション的合理性を再考し、その意義を高く評価している。しかし、コミュニケーション的合理性は、十分にコミュニケーションをできる個人を念頭に置いており、そのようなコミュニケーションを不可能にする諸個人を排除するものである。ジェイは、このコミュニケーションにおける排除の局面をどのように考えているのか。

日暮の返答：ジェイは、『アメリカ批判理論』所収の論文では、確かに十分にコミュニケーションし市民的公共圏の討議に参加できる主体を想定している。ポピュリズムが提起したのは、それに十分参加できない人々の意思をどのように代弁するかであったろう。ジェイ自身は述べていないが、そのような代弁にはSNSによる参加の工夫等もあり得るだろう。またその可能性は、ジェイの芸術や美学における論評のなかで論じられている。（ジェイはある新聞コラムの中で、マーロン・ブランド主演の映画『波止場』を、社会から排除された者たちが暴力的な権力に対抗する連帯を描いたものとして好意的に評価していた。）

質問3：アメリカ批判理論の新自由主義の分析は、デイビッド・ハーヴェイの議論に深く追っているように思われる。しかし、フランクフルト学派の第一世代（ポロック）もまた、政治経済の議論を展開していた。アメリカ批判理論は、このポロックを初めとする政治経済論をどのように評価しているのか。

日暮の返答：ジェイが言うには、ポロックの「国家資本主義」論は、第一次大戦後のケインズ主義によるニューディール政策等に対応しており、現在の新自由主義には十分対応していない。現在の新自由主義を十分捉えているのは、むしろハーヴェイの理論であり、フレイザーもそれに共感しているようである。ただし、現在の新自由主義が結果として権威主義的ポピュリズムを引き起こしたことを分析するには、アドルノ等の第一世代の理論は有効と思われる。アメリカ批判理論からの評価は以上である。アメリカの現状の政治社会情勢を理解するには、C.W.ミルズ等のラディカル社会学等も参考になろう。